

### 編集後記

21世紀に入って10年以上を経過して、社会のあらゆる面でスピード感が急速に増している。ICT (information and communication technology; 情報通信技術) の発展がその大きな原動力となっている。ICTは、医史学研究にも大きな影響を与えている。これまで入手に多大の時間と労力を要した貴重な資料が、インターネットを通して画像データとして容易に入手できるようになった。国立国会図書館の近代デジタルライブラリーでは、明治・大正期の図書が公開されている。大学でも図書館に所蔵する貴重書の画像をよく公開しており、とくに国内では京都大学、国外ではパリの biuSanté (Bibliothèque interuniversitaire Santé; 健康大学間図書館) が公開に積極的である。しかし何と言っても強力なのは、Google ブックスである。15世紀あたりから19世紀に至るまで、ありとあらゆる書籍が画像データとして、一部は文字データとして入手できる。資料の入手が容易になれば研究はもちろんはかどるが、それだけでなく研究の内容や質も大きく変わるようになる。膨大な資料を蓄積している限られた研究所や文書館でなければできなかったような、多数の資料に基づいた研究が、個人ベースでも可能になってきた。それらの資料を利用してどのような研究を行うかが、それぞれの腕の見せどころであろう。医史学研究の新しい一つの分野が開けようとしているように思う。

(坂井 建雄)